

協議会ニュース

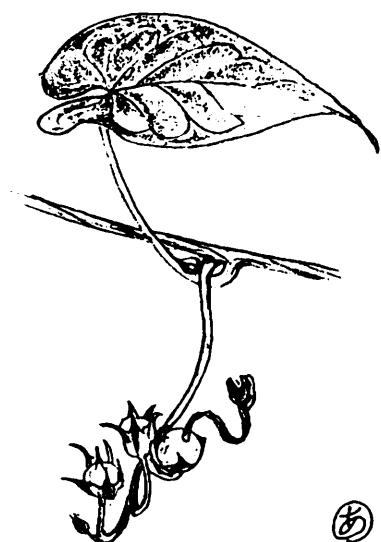
65号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1997. 10



マルバクルコウ *Quamoclit coccinea*

近頃空地でバーミリオンの花が目立ちます。マルバクルコウ(ヒルガオ科)です。熱帯アメリカの原産で、1850年ごろ渡来観賞に栽培されていたものが野性化した。別の図鑑では大豆について(販売されている)入ってきたと思われるとある。さて、どちらが正確でしょうか。<観察ノートより、'97/10-3>



◎

稲沢・一宮附近のシャジクモ類

佐藤徳次(顧問)

陸上植物の祖先といわれるシャジクモ類(車軸藻類)は、高等植物と同様に次第に減少しつつある。朝日新聞(1996.5.12)の報道によれば、全国で74種が報告されていたが段々数が減り、その内4種は絶滅したこと。その原因は水の汚染であり、例えば野尻湖や霞ヶ浦では絶滅したという。私がシャジクモ類に関心を持ち始めたのは昭和20年代であり、須賀瑛文氏に指導を受け池や水田で採集した。1971年の須賀氏の報告では愛知県内に32種、尾張地方だけでも19種もあった。それが今では私の住む稲沢市と隣の一宮市には2~3種が自生するだけである。それは普通種のシャジクモとトガリフラスコモであり、もう1種のジュズフラスコモは数年前まで多くあったが今はほとんど見られなくなった。

これ等は他の水草がほとんど無い休耕田に多い。休耕田には、キクモ、コナギ、クログワイ、イボクサ、ウキアゼナ、ホソバヒメミソハギ、キシュウスズメノヒエ等があり、これ等が一面に繁茂した所にはほとんど見られない。毎年7月頃から10月上旬の水田の水落しまでの間見られ、その後は一斉に姿を消す。他の水草は水が無くなても湿っておれば生き続けるが、シャジクモ類は直ぐに枯死する。成熟した卵胞子だけは残り厚い膜でおおわれるので冬も生き続け、翌年水田に水が入ると発芽して藻体をつくる。やがて真夏の日光を吸収して成長し群落を形成する。ほとんどの種は雌雄同株で雌器と雄器を着ける。両者の間に受精が行われ卵胞子が出る。稀に無性生殖も行われる。以前に大府市の池でシャジクモの節部に塊状体(バルブ)をつくっているものを採った。初めは虫こぶかと思ったが中に虫は居らず澱粉粒が多く入っていた。冬中水槽に入れておいたところ翌春塊状

体から発芽して藻体になった。稲沢・一宮周辺では池が無いので塊状体をつくる晩秋まで生きていれば、専ら卵胞子による有性生殖で増えている。

シャジクモ類の茎や枝の節間は、ほとんどの場合1個の細胞で出来ておりそれは肉眼で見える程の巨大な細胞である。細胞の中央部には大きな液胞があり、周辺は細胞壁に沿って原形質がとり囲み活発な原形質流動が見られる。その秒速を測ったら、シャジクモでは60~70ミクロンで一般に水温が高い程速度は大きい。低倍率で見ることが出き植物も生きており動くことが実感出来る。この類には蚊の幼虫を殺す働きがある。ぼうふらが生育する上で有害な物質を出すのだろうが、その物質名はわからない。庭に置いた水槽で試してみたが蚊は発生しなかった。種によってその力に強弱があるらしい。採集して藻体を手にすると独特の香りがする。香りの物質が関係あるのかもしれない。

シャジクモ類には6属があるが普通にあるのはシャジクモ属とフラスコモ属の2属である。両者の一見しての違いは、枝が分かれない方がシャジクモ属、分枝する方がフラスコモ属である。雌器の形と雄・雌器の位置関係も違う。シャジクモの雌器は大きく雄器と共に着く姿は双眼実体鏡で見ると大変美しい。朝日新聞:植物の世界139号には立派な写真が出ているので御覧願いたい。私は昔、フシナシシャジクモ、ホリカワフラスコモ、シンフラスコモ等珍しい種を犬山市内で採ったが、今はもう見られなくなり大変残念である。自宅附近の普通種も長く生き続けることを願っている。



観察会におけるゲームについて

(ネーチャープログラム)

篠田陽作(名古屋支部)

はじめに

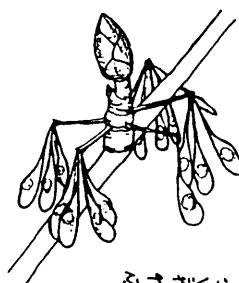
自然観察というと、とかく植物や昆虫、野鳥などの名前を教えるというイメージがありますが、まず自然に親しむ、自然と遊ぶ、そんなことから始めることが大切です。特に、子ども対象の観察会ではなおさらです。

しかし、自然に親しむとか自然と遊ぶとか言っても、どんなふうに行ったらよいか、観察会の経験がないとなかなか難しいと思われます。また、自然に慣れていない子ども達の場合は、何か面白いものを探していらっしゃいとか虫を捕まえてみようと言っても、どこへ行ったらよいかどうしてよいか迷うこともあります。

そうした場合に、ゲームとして作業に入れば子ども達も自然に遊び始めることができます。そのためのプマグラムをまとめてみることとしました。自然と親しむための方法や手段をゲームとして組み立て、マニュアル化することです。

話や説明を聞く受身の観察会から参加する観察会へ、そして行動して発見する観察会にするためには有効な方法かと思います。子ども達を対象とした観察会では自然とうまく遊

ばせることができれば成功といえます。おとなしく話を聞くのが苦手のはずですから、作業を通して発見したり、感動することが向いており、自分で発見する喜びと楽しさは子ども達を自然観察のとりこ



ふさざくら

にします。勿論、大人が参加できるプログラムとすれば、より深い自然体験と感動を与えると思います。ネーチャープログラムは、そんな考えでいろいろと試行錯誤を繰り返していますが、その一部を次に例示しますので、参考にするとともにさらに工夫してみてください。プログラムのポイントは、ゲームとしての楽しみだけでなく指導者として常に自然の理解に結び付けていくこと、一つのゲームの目的をなるべく幅広くして、その時の雰囲気や状況によって展開を変えることができるようにしておくことです。

なお、ネーチャーゲームとして一般に使われているゲームは、その会員でなければ勝手に利用できませんので、原則としては自分で工夫することが必要です。

具体的なプログラムの展開

①自然に親しむためのプログラム

生まれたときからの都会暮らしで、自然に対する基本的な体験の欠如から自然に対する持っている嫌悪感や恐怖心から解放するためのプログラムです。

②自然を楽しむためのプログラム

自然に慣れたら、次は自然の楽しさや素晴らしさを自分で見つけるためのプログラムです。

③自然の仕組みを理解するプログラム

自然を楽しめるようになったら、次は自然の仕組みや成り立ちを知るためのプログラムです。

④ 自然の守り方、付き合い方のプログラム

大切な自然を守るための方法や、付き合い方を知るためのプログラムも大切です。

以上のような4つのブロックに分けて、各々に10のプログラムを設け、全体で40位のプログラムで構成したいと思っています。個々のプログラムの主旨は同じでも展開によって大人向け、子ども向けに活用できるものがよいでしょう。また、同じプログラムでも季節やフィールドによって展開のバリエーションなども細かく検討すれば活用の幅は広がります。自分の観察会でいろいろとチャレンジして、良いプログラムができれば協議会へお知らせください、

ネーチャープログラム

〈例1〉 枯れ葉で遊ぼう

- ・季節：落ち葉のある時期
 - ・場所：林の中で落ち葉のある場所
- (方法)

まず、自分の足元にある落ち葉の中から適当に落ち葉を各3枚ずつ拾ってもらう。その落ち葉に虫に食べられた穴があいていないかを調べてもらう。そして、その枚数を合計してみる。（ $3 \times \text{人数} = \text{全部の枚数}$ ）虫に食べられた枚数と食べていない枚数の割合を調べてみる。その結果から虫がどの位いるものか推測してみる。

(展開)

その後、その虫の種類やどの時期に葉を食べたのかを話して聞かせる。さらに落ち葉がこれからどうなるかという質問により、足元の落ち葉をゆっくりはがしながら、落ち葉が土に返っていく様子を観察する。自然のリサイクルシステムが合理的なことと、そのシステムを支えている土壤生物やバクテリア菌糸などの働きも合わせて観察してもらう。最後に拾った3枚の落ち葉の名前を教えて、その木がどこにあるかもみてもらうことで、落ち葉から木の名前、森の仕組みも知ってもらう

ことができます。

(注意)

落ち葉の下にいるムカデ等に注意して怪我のないようにします。ダンゴムシなどの安全な虫は積極的に触らせたいものです。最後に手を洗うこと。

〈例2〉 四つ葉を探そう

- ・季節：クローバーのある時期

- ・場所：草原

(方法)

クローバーのある草原に座り、四つ葉のクローバーを探そうと指示します。その時、草の中に隠れている昆虫や小さな花、変わったものなどを見つけたら教えてくださいと約束します。そして、全員で横一列に並び、少しづつ前に進みながら探します。バッタなどの虫がいたら捕らえて虫かごに入れておきます。四つ葉のクローバーが見つかるまで5～10分続けます。四つ葉の見つかった場所の共通性を考えましょう。人に踏まれる場所に多いようです。

(展開)

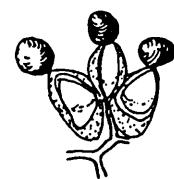
四つ葉のクローバーを見つけることよりも草原の虫や他の植物、地面の様子などをしっかり観察するのがねらいです。いろいろな発見や不思議なものが見つかるかもしれません。

小さな自然を観察するための手段としての四つ葉のクローバーさがしで、自然に慣れていない子どもを対象に考えています。

小さなキノコや虫、花などの発見を大ににしてゲームを進めます。捕らえた昆虫は図鑑で名前を調べたり、全体でどんな昆虫が多いか、草原で何をたべているのかなどを聞いたりし、子どもが見つけた草花は、何が特徴か考えたりします。

(注意)

落ち葉の下にいるムカデ等に注意して怪我のないようにします。



いぬさんしょう

最後に手を洗うように指示します。

④ 他のプログラム

[カードを使ってのゲーム]

① マーク探し

人数分のカードに、◊・♡・△・○などの様々なマークを書き込んで、そのカードの形と同じ物を自然の中から探してもらいます。子ども達はけつこう考えていろいろな物を探してきます。

探したもののが何なのか、どうしてそれができたかなど、それに関する質問をして、子どもに答えてもらうようなことを次に組み合わせることもできます。

② 実物さがし

カードに葉の絵（葉のコピーでもよい）を書いたものを子どもに渡し、落ち葉の中から本物の葉（該当する葉）を探してもらいます。カエデなどよく似た葉が数種類ある場所が面白いでしょう。逆に本物の葉を示して、カードの絵のどれと同じか探すことも考えられます。絵には脈に毛があるなどの説明をつけてもよいでしょう。これらは、図鑑を使う練習になります。

③ 絵を完成させるもの

葉っぱの輪郭だけの絵に、同じものを探して、脈や特徴を書き込んでもらったり、色を塗ったりしてもらいます。同様なことが、トンボやチョウなどの昆虫、水鳥の絵で行なうことができます。水鳥ではあちこちで行われているものです。絵の例を次のページに示しておきます。

④ グループの名前を覚える

別のページに示したような「あなたの好きなもの」を渡して、グループ内の他の人に聞いて回るよう指示します。このゲームを通じてグループのまとまりをよくすることができます。雨の時や、休憩中の時間が余ったとき

に行うものとして準備しておくこともできます。

⑤ 自然度調べ

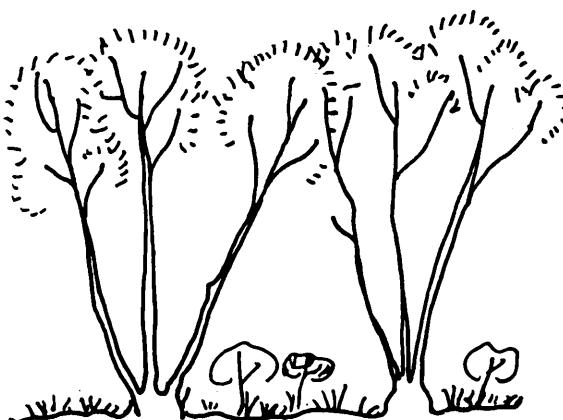
あなたの自然度をはかります、として観察会等の前にカードでいろいろ質問します。同様のものを、観察会の後にやって、自然度の変化をみることができます。人の自然度ということで案外面白がってやるものです。

[自然のものを使っての創作]

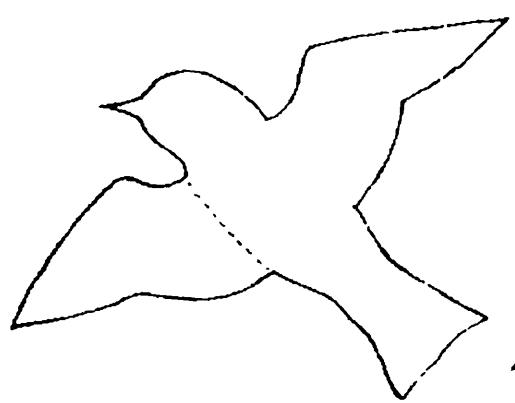
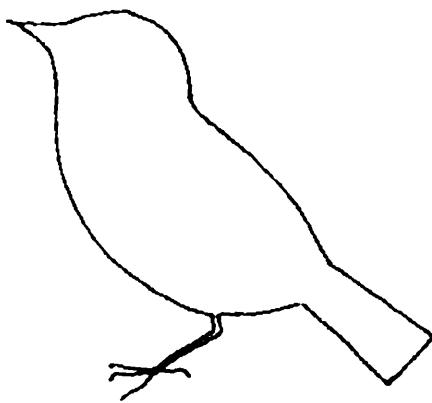
① 葉を使って絵を作る

落ち葉などを拾ってそれを組み合わせ、いろいろな絵を作ることもできます。作り方の説明をせずに子どもの自由な発想にまかせると、子どもはそれなり工夫して、意外に面白いものをつくります。こうしたことは草花遊びとして行われているものです。

これは、4月26日に研究会「自然観察会でのゲーム」として説明したものを主にまとめたものです。今回は試行的に整理してみましたが。機会があれば、さらにまとめなおしてみたいと思っています。関心のある方はご意見を下さい。

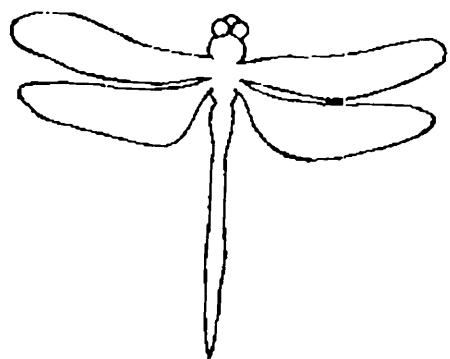
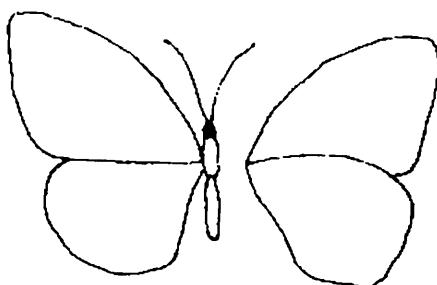


～鳥を観察しよう～



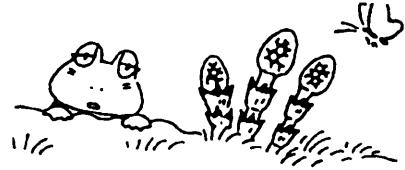
H. 8. 05. 16 Y. Shinoda.

～チョウとトンボを観察しよう～



H. 8. 05. 16 Y. Shinoda.

しっていますか？



あなたの自然度はかります

年 月 日 フィールド

なまえ

①春の七草を知っていますか？

⑥愛知県の木を知っていますか？

②秋の七草を知っていますか？

⑦名古屋市の花を知っていますか？

③野鳥のたべる木の実を3つ書いてください。

⑧松の花を見たことがありますか？

④渡鳥の名前を3種類書いてください。

⑨スミレの種類を2つ書いてください

⑤ドングリのなる木の名前を3種類書いてください。

⑩ナンジャモンジャの別名は？

H. 8. 02. 18. Y. Shinoda

あなたのが好きなもの

年 月 日 フィールド

なまえ

①あなたの好きな花は？

です。

②あなたの好きな木は？

です。

③あなたの好きな野鳥は？

です。

④あなたの好きな動物は？

です。

⑤あなたの好きな山は？

です。

⑥あなたの好きな音楽は？

です。

⑦あなたの好きなものは？

です。

⑧あなたの好きな食べ物は？

です。

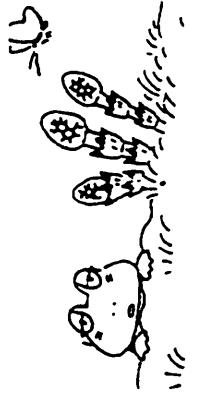
⑨あなたの好きな季節は？

です。

⑩あなたの好きな言葉は？

です。

H. 8. 02. 18. Y. Shinoda



日本人と自然（2）

佐藤国彦（名古屋支部）

古代人の自然観は、アニミズム的であったが、それだけに彼等の生活や精神に深く根をおろしたものであった。

しかし、その後時代が進むにつれて、日本人の自然の見方は、文化的には類型化、様式化傾向が強くなり、「花鳥風月」とか「雪月花」という言葉があるように、特定のイメージの自然のみを好むようになっていった。花と言えば桜、景色なら日本三景とか特定の名所等に限定してしまうようなパターンができるがった。

この傾向は、江戸時代頃には最も強くなり、例えば自然の有様を様式化して屏風に描いたり、自然を抽象化して庭園としたように、絵画、音楽、文学、造園などに現れる自然はかなり様式化されている。庶民の自然の楽しみ方にも江戸などの都市では、花見、川下り、盆栽というような型ができている。

江戸時代の文学では、特に市民文化と呼ばれる時代背景からも、人間の喜怒哀樂をテーマとしたものが主流をなして、自然についての描写は添え物的になってしまったように見える。「春たつと、去年の雪げを、そのままに、霞むも山の奥丹波、軒のつららもとけ渡り……」（近松、大経師昔暦）のように、自然の風物を描いた文章は多く現れるが、その扱いは自然の有様や美しさを目的とするのではなく、枕言葉に類した言葉の遊びとか登場人物や心の動きの背景としての役割を持つに過ぎない。

自然の描写をねらいとする俳句でも、人事との関わりが強く、「閑かさや岩にしみいる蝉の声」など自然の描写に苦心した芭蕉でさえ、人の心のあり方に关心があり、「此道や

行く人なしに秋の暮」の方が芭蕉らしい句といえよう。芭蕉は風雅を強調し、天然自然に従い造化を友とすることが本来だとしたが、その風雅は「芭蕉の風雅」としてのもので、自然を純粹に友としたか疑問があるような気がする。また、芭村についても佐藤春夫が、芭村の俳句の風流は彼によって築かれたもので、自然の子ではなく、自然の孫になってしまっていると評したように、自然をそのまま観察するのではなく、自然を象徴的に取り上げる傾向は強かったように思える。

このように、自然そのものを楽しんだり、観賞したりするのではなく、自然の一部を象徴化し、類型化してその風情を楽しむが当時の文化人のあり方で、現実の自然を離れて、理想的な自然を観念的に作り上げるのが、日本人の自然観として定着したように思われる。そして、このことは、自然のもつ多くの美しさに眼を閉じる結果を招いた面もあると言えよう。

こうした自然の見方のパターン化は古今集の時代からはっきり見られるもので、万葉集は日本人の自然観が出来上がる以前の特異な作品であるかもしれない。

とは言っても、当時の人々の自然との接し方は決して浅いものではなく、古典などを土台に、自然の持つ風情を日本人独特の繊細な感覚で象徴化したもので、それは文化人だけでなく、その作品を観賞した一般の人々にも共通した下地となっていた。例えば、花鳥風月という言葉に使われている「風」は、形のない肌で感じなければわからない微妙なものであるが、風景、風光、風情など多くの言葉として使われている。雨などでも、時雨、小

驟雨、さみだれなどの言葉が示すように、雨の微妙な違いを見分けていたのである。

また、自然のたたずまいに常に関心を寄せる習慣も古くからあったようで、徒然草の中にも「雪のおもしろうふりたりし朝、人のがりいふべき事ありて文をやるとて、雪のことなにともいはざりし返事に、『この雪いかがみると、一筆のたまはせぬほどのひがひがしからん〔物の趣の解らぬ〕人のおほせらるること、ききいるべきかは。返す返すも口をしき御心なり』といひたりしこそをかしかりしか。」とある。自然の有様に注意を向けない人はあさましきものと言うのである。気候の移り変わりを暑さ寒さでしか感じないようになりつつある現代の我々も再考すべき点であろう。

一方、都市部を除いた各地の農民の生活は依然として貧しく、生活に追われていたが、自然との関わりは深く、古代からのアニミズムは仏教の影響で変形しつつも残っている。

例えば、当時の民間宗教には仏教からきた観音信仰や地蔵信仰などとともに、多くの自然神が生きていた。田の神、山の神、蚕神から荒神（火の神）、水神など生活に係わるあらゆるものに神があり、時には狐、狸や蛇などの動物も神やその使いとして、信仰の対象となっていた。それらの神は日々の生活の中で、人々の信仰を得るとともに、祭りや講などとして村の人々の楽しみとも結び付いていた。江戸時代中期からよく作られた観世音、庚申、道祖神などの石仏は、今でも奥三河から長野県、関東西部にかけての道端などに見られる。石仏そのものは、人間の営みの中から生まれてきたものであるが、それが田の端や山の鼻などにひっそりと建っているのは、当時の農民の営みが自然の雨風の中でひそやかに続けられてきたのを象徴しているようである。

また、山奥などは天狗、山姥やいろいろな妖怪の住む場所であり、人のやたらに踏み込

めぬ所となっていた。自然の神秘的な面、不可思議な面が人々の心に生きていたのであり、全て科学的に解明しようとする現代と比べて何かうらやましい気もしないではない。

江戸時代にあっても農民は、土地と年貢に縛られ、日々の生活に追われていた。さらに度重なる飢饉や流行り病など自然や人間の力の及ばないものの影響を強く受けている。そうした中で、自然は生活の糧に大きな影響を与えるものとして、自然の恵みとともに恐ろしさも感じていたと思われる。農業や漁業などでは天候の影響を強く受けるため、生物の動きや季節変化の変動に注意を払っていた。

「カマキリの卵が高い所にあると大雪」「クモの巣に露がかかると晴」「星が近く見えると雨が近い」など多くの経験的な諺が残されている。時には、「猫が耳の後まで顔を洗うと雨」という怪しげなものもあるが。

このように自然を深く観察し、その変化に何とか対応しようとしていた当時の人々、あるいは象徴的で様式化した自然を見つめていた当時の文化人ですら、自然を単なる楽しみの場として、美しさを観賞するだけの現在の我々よりは、生活に直結していただけに、自然の価値を十分知っていたに違いない。

なお、様式化あるいは形式化は、当時の文化人などの自然の見方としてあるだけでなく、日本人の思考方法そのものとして現代まで続いているようにも思える。現実から象徴的に取り出したものを大切にし、現実から目をそらしてしまう面があるのでないか。例えば、複雑多様な自然の中で、一部の貴重な植物さえ貴重なるがゆえに守ればそれで自然が守られたように考えてしまうというよう。



会員紹介

エールに代えて

“ありがとう”を

塚田桂子(尾張支部)

いつの間に、もう秋！……早世した立原道造の詩の一節です。その原風景を辿って旅をした10代の終りに、信濃追分で見たススキと初秋の風の色を思い出しています。

時には大空を飛ぶ鳥の視線で、独特の観察便りを送って下さったIさん、お元気ですか？停滯続きの私にも、善師野での感動や思い出があります。大洞池の上を、サンコウチョウが飛んだ！ その瞬間のドキドキと長い尾を引いたあの鳥影は、10余年を経た今も鮮かな記憶の一つです。

乱開発優先のあの時代に、「豊かな自然を子孫に残そう」と、静かに、熱く呼びかけて下さった先輩たち。その卓越した先見性と行動力。私の意識改革の恩人たち。まさしく、ナチュラリストの称号にふさわしい大先輩たちに、“ありがとう”を送ります。

それ以前の私は、果実酒やジャム作り、植物染料やリース飾りの材料集めに、喜々として野外を歩き、一日はあの立原の「アンリエットとその村」のように過ぎたのでした。

ところでIさん、「いのち」を色に譬えると、あなたにとって何色ですか？闘病中の長姉を励ましながら、祈りにも似た気持ちで、つややかな赤いガマズミの実を見つめているこの頃です。

Iさん、伝えたい感動があります。落ちついたら、歩きませんか？あの道を。コジュケイの声に誘われて、ホタルカズラの咲く頃に。

Iさん、辛口のコメントを待っています。日本列島のこの10年の様変りを、あの鳥のまなざしで直視して。

石の上にも5年

皆様方のご指導に

支えられて

原田 勉(西三河支部)

平成4年春、本宮山くらがり渓谷管理の方から「渓谷に多くの人達が来てくれるよう自然観察会か何かやって」と頼まれました。私にそんなことができるのかなと思い心配しながら、パンフレットやポスターを作りました。そして、平成5年春から「くらがり渓谷自然観察会」を始めました。

最初は指導員だけでだれも来ませんでした。でも指導員だけで渓谷を見て山頂まで行きました。都合をつけて他の観察会にも参加しました。佐藤国彦先生の「植物や鳥の名前を言ったら、その後にもう一言」これは簡単なようで私には大変なことでした。今でもこの一言に苦労しています。

そして5年。今年になって観察会に参加して下さった方から、次のような手紙を頂きました。「（前略）有意義で楽しい一日を過させて頂きまして感謝しております。「〇〇の木は、あの山に1本」と言うような説明には驚嘆いたしました。山を愛し、植物を愛すればこそそのお心の表われだと思いました。草木の名前は疲れのため多くを忘れましたが、先生の植物に対する思いは疲れた頭にも印象深く残っております。教え甲斐のない者ですが、またお供をさせてほしいと思っております。お目にかかる日を楽しみにしております。ありがとうございました。」です。これも皆様方が指導して下さったお陰と深く感謝し、厚くお礼申し上げます。今後ともよろしくお願ひいたします。



会員紹介

軽井沢の夏

(プロの指導員)

藤本知重子(名古屋支部)

空高く飛び交うイワツバメに双眼鏡のピントを合わせる事から観察会は始まりました。ここは軽井沢の野鳥の森。我が家この夏最大のイベントとしてはるばるやって来ました。

指導員はやさしそうな青年でした。彼の口調は気取らず自然な感じで、緊張ぎみの私の気持ちをなごませてくれました。ここ「ネイチャーウォッチング」は毎朝行われているそうですが、とても沢山の人が集まっていました。年配のおじ様も若いお姉様も…一番小さいのは多分うちの息子らだったでしょう。

その子供達のご機嫌がややなめだったので、お話ししてくださる事になかなか集中できませんでしたが、とても楽しい森の散歩でした。柏のザラザラとした葉に触ったり、夜にはムササビが木から木へ飛びまわる話を聞いたり、エゾハルゼミのジーという声に耳を傾け、オニヤンマを捕まえ、リスがどの様にクルミの実を食べるかというクイズに挑戦したりなどなど。

特に驚いたのは、指導員は一民間会社(星野リゾート)に属するプロだという事でした。私は自然観察指導員はボランティアであっていいと思うのですが、プロだからできるという事もきっと多いでしょうし、求められるからこそ質も高くなり、知識の幅も広がるでしょう。実際参加してみて、事業としての観察会に好印象を持ちました。解説の上手さ、親しみやすい雰囲気、内容の豊かさ等に魅力を感じました。「なんとなく指導員状態」の私には何だかとても新鮮でした。

半田市に来て以来ほとんど活動していませんが、今後出来る所から関わられたらと思っています。よろしくお願いします。



飽満の今

自然との共生を

中島芳彦(東三河支部)

昭和20年代、山里では、田畠はもちろん溜池、小川、里山は生活の場であり、遊びの空間、食料調達等なくてはならない場所でした。そこで生活は、自然と対峙することなく、人間も自然の一員として生きるほかありませんでした。

私の幼少期の山里は、自然と共生している時代でした。農家といえど、大家族が満足できる食料もなく常に飢えていました。野山をかけずり廻り、お腹を満たしてくれるものを探していました。春は食草と毒草の区分けを覚えながら、ブヨに刺されない工夫を、夏はウナギ獲りに熱中しながら、低水温の所はどうして危険か、川の深みや流れは、どこまでなら大丈夫か等体で覚えていきました。秋にジネンジョ、ヘボ採りをしながら、マムシ、ハチに襲われないためにはどうするのか、先輩が後輩に引き継いでいきました。それでも怪我や失敗は、日常茶飯事で生傷が絶えず、体で自然と付合う方法を覚え込んでいったのです。

時は流れ、もはや戦後ではないといわれた高度成長時代を境に、山里も自然との共生関係から、経済優先主義へと移行しました。野山から子供たちの姿が消え、まして食料調達などありえない時代となったのです。この頃から人間が自然を操作することができるという錯覚に陥るようになってしまったのです。

飽満な現在、自然を知識として蓄積することは可能ですが、自然を知る知恵と、付合い方が体験できないのではないのでしょうか。

子供たちに自然観察という知識と、自然体験という知恵が備われば、将来、自然との接し方喪、今流行の安易なアウトドア志向から脱皮し、眞の自然派人間が大勢を占めるようになるのではないかでしょうか。

華やかな宴は長くは続かないから。

定例観察会

東山自然観察会

滝田久憲（名古屋支部）

名古屋の東山一帯には、平和公園から東山公園を経て、八事裏山、八事畠園に至る東部丘陵と呼ばれる標高約50～90mのなだらかな丘陵地（総面積で430ha）があります。

東山自然観察会は、毎月1回、第3日曜日午前9時30分に東山植物園正門横に集合し、この東山公園の一万歩コースや東南部の八事裏山などを半日かけて散策し、四季おりおりの自然の変化を楽しんでおります。

【観察会の経緯】

当観察会は「東山の自然を守る会」が東山の自然保護活動の一環として、東山の自然のすばらしさを人々に伝えるために発足したもので、1988年3月27日（この当時は、第4日曜日）に第1回目の観察会が行われました。この中心メンバーが武田篤氏（名古屋支部）で、当初は、観察会と並行して、ゴミ拾いや草刈り、ため池の浚渫などの湿地の保全活動を参加者を交えて行っていました。

ところで、この当時、この東山南部には、160haの広大な未開発の自然が残っておりました。都心に比較的近く、交通の便の良いこの地を開発側が放っておくわけがありません。1994に行われた「わかしゃち国体」のテニス会場の建設工事、そこへアクセスするための道路の拡張工事、国道153号線延長工事による丘陵地の分断、東山の地下を通る名古屋高速道路のための換気塔設置工事などが行われました。これに対して、会として、色々な環境団体と連携して、公開質問状や要望書などを関係当局に提出したことが、観察会発足時から発行されている「ひがしやま通信」に記録されています。途中からは、自然観察主体となり、1996年6月に第100回目を迎えたのを機に、それまでのメンバーによる活動に終止符が打たれました。こ

れまでの灯を消してはならないと、その翌月以降からは、この時期に新たに観察会に参加していた新しい自然観察指導員が中心になって、「ひがしやま通信」の毎月発行を含めて、会の運営がなされています。

【自然環境】

東山一帯は、八事層（第4紀、約80～70万年前）と呼ばれる疊を多く含んだ地層から成り立っています。この疊層には、中・古生層のチャートや砂岩、頁岩などが含まれ、尾根筋は、痩せているために、コバノミツバツツジを伴ったアカマツ林が成立しています。また、斜面、沢沿いにはコナラ、アベマキを優占する林が見られます。また、丘陵地の斜面からのわき水により、東海地方固有の湿地や小さなため池が形成され、コモウセンゴケ、シラタマホシクサ、サワギキョウなどの湿地植物やトンボ、ヒメタイコウチ、トウキョウサンショウウオなどの種々の動物を観察することができます。

【観察会の方針】

この自然観察会を、都市の中に残された身近な自然をフィールドにして、「自然のしくみやその大切さを学び、身近な自然を守る気持ちを養うための学習の場」と考えております。そこで、地域の人々、とりわけ子供たちにも多く参加してもらいたいと思っております。東山の南部には、湿地を始めとした多様な自然が残っていると同時に、ゴミの不法投棄や公共事業などによる自然破壊もあります。こうしたものから、自然と人間の共生、開発と保護などの問題も考えさせられます。

指導員になったものの、まだ自分のフィールドを持っていない方、新しく指導員になって、はじめの第一歩を踏み出したいと思っている方、この観察会にぜひ参加してください。

どんぐりフェスティバル
スタッフ募集
近藤記巳子（名古屋支部）

高松塚古墳、なごの石造物など、歴史的遺産をちりばめた奈良県明日村、国営飛鳥歴史公園をフィールドに、“どんぐりフェスティバル”の催事を、近藤が担当することになりました。どんぐりをテーマに、観察、クラフト、アクティビティなどのプログラムを考えています。

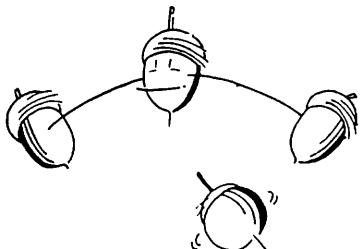
スタッフとして一緒に活動していただける方を募集します。是非、近藤までご連絡下さい。

期日：11月24日（振休）

午前10時～午後3時30分

場所：国営飛鳥歴史公園（奈良県）

連絡先：近藤記巳子☎ (052)822-7460（夜間）



また、相生山緑地（名古屋市天白区）での観察会のスタッフも募集しています。今年度、愛知県自然観察指導員講習会に参加されたみなさん、もし、特定のフィールドを持っていないのなら、相生山緑地を活動の場所にしませんか。相生山緑地自然観察会は、毎月第4日曜日に、梅野公園（天白区野並4丁目）東グランド前に集合し、午前9時30分から12時くらいに行ってています。

連絡先：近藤（記）☎ 822-7460（夜間）

鈴木（ひ）☎ 822-3484

渡辺 敏 ☎ 242-1519（平日、夜間）



ツツジ（ツツジ科）

太田順造（名古屋支部）

日本にツツジの種類多く、現在数十種に及び、山野・庭園を彩っている。万葉集、平安時代の多くの歌集にうたわれているが、何ツツジに当るかはさだかでない。当時歌を詠み文章を書いたのは貴族階級、深山に入って詠んだとも思われないので、ヤマツツジ、コバノミツバツツジ、モチツツジがその主たるものと思われる。

ツツジのツツは筒、ジは古語で締まるの意。或いはツツは包むの意とも考えられるが、それらが接合してツツジとなったと思われる。

ツツキサキギ（続咲木）の意と花と樹の人辞典には記され筒咲き状の花形に由来したと。

・ミツバツツジ 3枚の葉がトランプのクラブの形で芽出るところから由来

・モチツツジ 花柄や萼に腺毛があってねばることからこの名が付く

ツゲ（ツゲ科）

イヌツゲ（モチノキ科）

ツゲ

次ぐと云うのが変化したものと云われる。即ち葉が柄をなし密につき次々とついているからの意。

版木、櫛、印鑑材に多く使われる。

イヌツゲ

庭木でツゲと云われるのは大部分がイヌツゲを指している。

イヌツゲはツゲに似ているが下品でツゲのように役立たずであるからイヌの語が用いられたと思われる。



事務局から

[行事結果]

★基礎研修会「地質に強くなろう」

〔期日〕平成9年8月24日

〔場所〕名古屋市公会堂

〔講師〕吉村暁夫さん (出席9名)

〔内容〕

第三紀、第四紀の愛知県の地形地質の状況についての内容だった。現在の地形の基礎となる時期で、多くの想像を混えた地形地質の動きは大変面白いが、何となく取っ付きにくいのは岩石の分類の難しさからくるのだろうか。

観察会ではあまり触れられない分野であるが、地域の自然を理解するには大切な面もあり、今後とも力を入れたいものである。

★基礎研修会「草原の虫、泣く虫」

〔期日〕平成9年9月15日

〔場所〕名古屋ユースホステル

〔講師〕水野利彦さん (出席8名)

〔内容〕

台風がらみの天気であったため、室内の部だけとなった。直翅目のバッタ・キリギリス・コオロギとおまけにトンボ類の尾張部における生息状況や見分け方などを中心に、多くの標本を見ながら学んだ。室外ではハラオカメコオロギが鳴いていた。

★研究会「街の中の観察指導②-都市河川-」

〔期日〕平成9年9月23日 (出席7名)

〔場所〕山崎川(瑞穂グランド周辺)

〔内容〕

河川は人間生活の影響を大きく受ける場所であり、植物や動物だけでなく、生活との関わりをテーマに指導するのに適している。その意味で、NACS-Jの河川の自然度をもう少し直してみたいとも考えている。

★理事会

〔期日〕平成9年9月27日 13:30~16:25

〔場所〕名古屋市公会堂 (出席11名)

〔内容〕

(1)会計の状況

収入 1,922,135円、支出 1,398,776円
印刷費と保険料は予算を2割以上オーバーすることを了承する。執行状況としては、木曽三川観察会の臨時収入があったため、今年度は何かやりくりできそうな感じであるとの事務局からの報告があった。

(2)事務局の所在地について

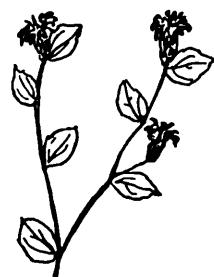
今まで事務局の所在地を愛知県の自然保護課としていたが、県から民間団体の事務局を県に置くことは好ましくないため変更するよう要請があった。検討した結果、他県でも個人宅に置いているところがほとんどであり、県の立場もあることから、事務局の所在地は日進市に変更する方向で規約変更を考えることとなる。

(3)新会員の受け入れについて

10月の講習会で新たに50名程度の新会員が加入する見込みで、各支部に入りやすいように歓迎会等の行事を各支部で考えることとなる。

(4)自然保護運動について

東京の連絡会の金田さんから、千葉県の連絡会が自然保護運動を止むを得ず始めたことについて支援して欲しい旨の連絡があったこと、万博の反対シンポジウムで後援依頼があったことに対して事務局としては特に何の措置を講じなかった。その理



由として、会の性格から普及事業を中心としたこと、多数の会員の意見をまとめにくいくこと、行政との付き合いも大切なこと、保護運動に携わるほどの余裕がないことを事務局としては考えている旨の報告があった。理事会での検討結果としては、協議会の性格から多様な会員があり、統一的な運動に参加することは当面難しいが、適切な意見が言える会として勉強していく必要があるとまとめられた。

[主な意見]

- 事務局の対応は間違っていないと思う。反対のための反対運動となることを恐れる。
- 基本的には保護運動に深入りすべきではないが、愛知県は開発志向が強く、問題があるときは会長名でコメントすることも必要である。
- 私達の考え方と行政の進め方には確かに差がある。特に、東海三県は保守的な気がする。運動でなくてもよいが、何かアピールすることは必要である。保護団体の考えが極端になり過ぎる面もある。
- 支部としては、反対運動的な観察会に協力している面もある。
- 観察会の実施場所での開発に対して何かしても良いと思う。自然が好きな者として意見を言うことも大切である。
- 後援程度なら問題ないではないか。
- 行政にいきなり反対を述べることは難しい。行政の行う審議会や協議会に参加して実現可能な意見を言うのも方法である。
- 適切な意見が言えるためには、開発に対する情報を得る努力、技術的な知識を身につける努力も必要である。具体的な対策が出せないと対立しか残らない。
- 指導員と協議会を分けて考えることが必要である。会としては様々な会員がいる中で統一した意見を出すことは難しいが、指導員としてはどんな活動もできるはずである。
- 運動のためには、NACS-J会員などいろいろな名前が使える。
- 誰でも気持ちとしては自然破壊に対する怒

りやいらだちは持っているが、それを実現する方法にはいろいろあってもよいではないか。

(5) 会の運営について

支部の人数にかなり違いがあり、また地域が広すぎるところもあるので、支部体制を検討してはどうかとの意見が出された。急いで解決すべき問題ではないので、まず部会で検討してみることとなった。



(7) 経理規定の変更について

総会で決まった会費の値上げについて経理規定の変更がしてなかったことと、研修会の講師等の謝礼や会議等の旅費の支払基準を細かく定めた事務局案に対して、原案通り承認された。なお、2月に遡って適用することとされた。

(8) 平成10年度の事業計画について

おおむね9年度と同じ方向で進むこととし、細かい点は部会で検討することとした。

なお、事務局としては10年からフォローアップ研修として、初心者向きの観察指導や自然の知識についての研修を行う計画である。

[主な意見]

- 協議会の事業のうち観察会は軌道に乗ってきたようであり、研修会もまあまあの状況で開催されているが、残る主要事業の調査が弱い。自然の動きに関するデータ収集などは重要なことであり何とかしたいがどうか。（会に余力がないので今後の課題とする。）
- 研修会に開発に関する技術的知識やビオトープなどを入れて欲しい。
- 機関誌の内容は文章が多くて遊びが少ないので検討して欲しい。

*次の理事会は、2月の予定。

行 事 案 内

☆基礎研修会「環境問題はどうなっている」(室内)

期日：平成9年10月25日(土) 10:00～12:00

場所：名古屋市教育館第8研修室

講師：藤井敏夫

- ・今環境問題の中心は何か、自然観察会で何が伝えられるか。

☆話題の地見学会「里山管理の方向」

期日：平成9年11月3日(休) 9:30～12:00

場所：相生山緑地 集合場所：梅野公園東グランド(地下鉄野並駅から徒歩10分)

- ・相生山緑地管理とこれからの里山について

☆指導員研修会「どんな観察会をめざすか」

期日：平成9年11月23日(休) 15:00～24日(振休) 終まで

場所：下条ランド(長野県下伊那郡下条村)(現地集合)

- ・初日は昼も夜も意見交換、情報交換で。翌日は周辺の植物、動物の観察します。

詳細は申込者に連絡。

☆基礎研修会「クモの種類と生態」(室内)

期日：平成9年12月13日(土) 13:30～16:00

場所：中小企業センター7階第2会議室

講師：須賀英文

- ・身近なところにどんなクモがいるか、その分類と生態について。

★問合せ先：いざれも佐藤(☎05617-3-5674)まで

■「自然なにかとアンケート」

第4回の自然に関するアンケートを行います。今回のテーマは、「観察会で困ったこと、失敗談」です。どんな問題が起きたのか、どう対応したのか、どうすればよかったのかなど、経験談を教えてください。締切り11月25日。

■編集後記

10月、自然観察指導員の新しい仲間が生まれました。
指導員が増えていくことは
自然が好きな人が増え、自然を守る力が増える
ことになると思います。毎回原稿欠乏症になってしまいます。皆様の原稿をお待ちしています。(近藤)



— 目 次 —

稲沢・一宮附近のシャジクモ類	1
観察会におけるゲームについて	2
日本人と自然(2)	7
会員紹介	9
塙田桂子、原田勉	
藤本知重子、中島芳彦	
東山自然観察会	11
どんぐりフェスティバルスタッフ募集	12
ツツジ、ツゲ、イヌツゲ	12
事務局から	13